

## 無事終わってよかった 前代未聞の大相撲

コロナウイルス騒動の影響で「無観客開催」という前代未聞の春場所になった。テレビで見ている背景に落ち着きがないし、ラジオで聞くと歓声が聞こえない静寂さが奇妙だ。

相撲をとる力士の側からすると、「観客の響めきがないので気分の高揚がない」とする声と「周囲の雰囲気の影響されず、冷静に自分の気持ちだけで動ける」とする声があったようだ。

場所前のおおかたの報道は「朝乃山が 12 勝すれば大関」「朝乃山は優勝して大関」などムードだけが先行していた。

## &lt;1&gt; さてさて優勝争いは

紆余曲折はあったものの、千秋楽に東西横綱相星決戦という結末となり、相撲協会としては安堵の締めくくりというところだろう。

白鵬は 9 日目まで白星を積み重ねはしたが、「雑な相撲」「手荒な相撲」が目立ち「勝ちたい」という意識が全面に出過ぎていて「秀麗さを欠く」感じがした。

10 日目、阿武咲に良いように相撲を取られてしまって完敗。怪我で長く低迷していた阿武咲を侮った軽い身のこなしが墓穴を掘った。勝負がついた直後の白鵬の「しまった」というような表情が、それを物語っていた。翌日の北勝富士戦では立ち直ったかのように見えたが、12 日目に再び正代に無様な負け方。この二つの取り組みの共通点は、「白鵬が張り手で来たなら、かまわず前進して空いた脇の下に食らい付いて突っ走れ」という点にあるように感じた。

正代は顎を突き出して胸を出すような相撲を取るという「直らない癖」を持っていて、これゆえに上位に定着ができない。白鵬の張り手が何発か動いた瞬間、正代は突如顎を引いて頭を下げて白鵬の胸にかじりつくように前進。これですべてが終わった。この日も白鵬の反省と後悔に満ちあふれた表情が印象的だった。しかし翌日は崩れることなく朝乃山を下し、千秋楽に駆け込み賜杯を手にしたのはさすがであった。

## &lt;2&gt; 新大関の誕生やいかに

巷間囁かれていたこと「大関昇進の目安は、三役で三場所合計 33 勝が目安」。

朝乃山の実績は、2019 年 9 月場所(前頭 2) 10 勝 5 敗・2019 年 11 月場所(新小結) 11 勝 4 敗・2020 年 1 月場所(関脇) 10 勝 5 敗という流れで、三役としての経歴はわずか三場所しかない。

2019 年 5 月場所で平幕優勝をしたことが引き金となって追い風が吹いてきたとも言うことができる。

安定した右四つの相撲が特色で、鋭い立ち合いから前進をしながら自分の型を作っていくというのが強みで、前進相撲の中で突き押しもこなすことができる。この間の腰の構えが低く、右四つながら左上手にはこだわらず、脇を固めた強いおっつけが特徴で安定感が感じられる。

今場所は 11 勝 4 敗の成績を収めることができたが、前半で平幕相手に 2 敗して早い時期に優勝戦線からは脱落してしまい、後半の対横綱戦では二戦とも完敗であまり良い印象がない。

高安が陥落して大関は貴景勝一人になってしまい、しかも貴景勝は大関昇進後の怪我が元で不安定な状況にある。相撲協会としては「早く二大関にしておきたい」というのが本音に違いない。おまけに二横綱の先行きもあまり明るい展開とは言いがたい状況で、早く次なる看板力士を作っておかなければいけない。

このところ、大関に昇進させたものの僅かな期間で陥落してしまう事例が目立つので、安易な昇進は危険が伴うことも認識しておく必要がある。

◆朝乃山の成績                      三役在位三場所の成績=32 勝 13 敗(内関脇在位 2 場所 21 勝 9 敗)  
直前 6 場所の勝率=60 勝 30 敗(勝率 0.667)

## &lt;3&gt; 今場所目立った力士

隆の勝は2018年9月場所に新入幕。怪我もあって、一旦跳ね返されて十両に下がったが、2019年11月場所に再入幕し、今場所は自己最高位の前頭9枚目。再入幕から相撲が変わってきた。腰を低く落として前傾姿勢を保ちながら、下から押し上げるような強い押っつけて相手の体を浮き上がらせる。とりわけまわしを取ることに拘らず、前へ体重をかけながらのこの動作は迫力がある。今場所はこの相撲が全面に出て12勝3敗の好成績をあげ、敢闘賞を手にした。余談だが、技能賞を手にした碧山は敢闘賞で、隆の勝が技能賞のほうがしっくりするように感じた。

長く勤めた三役の座を明け渡して前頭3枚目に下がった御嶽海は、全盛期の相撲ぶりが戻った感じで、両横綱に勝てなかったのが意外ではあったが11日目まで2敗を堅持。残念ながら終盤に力のある突き押し相撲の3力士に敗れて10勝5敗に終わった。これをきっかけとして来場所以降の活躍が期待できるかもしれない。

阿武咲も長い長いトンネルを抜け出してきた感じがする。10日目に白鵬を破った相撲は新入幕当時の力の再来を感じさせた。この復活ぶりを白鵬が予測していなかったために粗雑な取り口になった。

碧山は突き押し相撲を主力とした力士だが、これまで千代大龍と同じように「二の手で叩く」ことを前提とした突き押しが多かった。今場所は叩きやいなしに頼らぬ相撲になり、11勝4敗の好成績で技能賞を手にした。「来場所も同じ相撲が取れるのか」の心配が残るのだが…。

三賞の対象にはならなかったが、霧馬山と志摩ノ海の相撲が光っていた。来場所に繋がるものが残ったとしたら期待が膨らむのだが、どうだろうか。

#### <4> Appendix

現在の規程によると、大関は

「二場所連続で負け越すと関脇に陥落」「関脇に陥落した直後に10勝以上あげれば大関に復帰できる」とされている。もしこの規程が存在しなかったら、この大関はどうなっていただろう。

新大関の場所から一年間、関脇以下の力士と同じように「勝ち星と負け星の数の差」だけ地位が上下するとしたらどうなっただろうという乱暴なシミュレーションをしてみた。

貴景勝以外の力士については過去の記録となるので、この先を埋めてみると面白い結末になる。この特例的な規程の有無に関わらず大関の地位に留まることができたのは稀勢の里だけということになった。

過去の大関昇進を批判・否定することではなく、「大関昇進」というものを多角的に捉えてみた上で、「今後どうあるべきか」を考えることが大事なのではないかと思う。

力士名	新大関		(規程がなければ地位はこうなった) *成績は実際の成績を示す				
貴景勝	2019-5月	→	2019-7月	2019-9月	2019-11月	2020-1月	2020-3月
	新大関 3勝4敗8休		(関脇) 全休	(前頭10) 12勝3敗	(前頭1) 9勝6敗	(関脇) 11勝4敗	(関脇) 7勝8敗
高安	2017-7月	→	2017-9月	2017-11月	2018-1月	2018-3月	2018-5月
	新大関 9勝6敗		(大関) 1勝2敗12休	(関脇) 8勝5敗2休	(関脇) 12勝3敗	(関脇) 12勝3敗	(関脇) 全休
栃ノ心	2018-7月	→	2018-9月	2018-11月	2019-1月	2019-3月	2019-5月
	新大関 5勝2敗8休		(関脇) 9勝6敗	(関脇) 8勝7敗	(関脇) 0勝5敗10休	(前頭10) 7勝8敗	(前頭11) 10勝5敗
豪栄道	2014-9月	→	2014-11月	2015-1月	2015-3月	2015-5月	2015-7月
	新大関 8勝7敗		(大関) 5勝10敗	(関脇) 8勝7敗	(関脇) 8勝7敗	(関脇) 8勝6敗1休	(関脇) 9勝6敗
稀勢の里	2012-1月	→	2012-3月	2012-5月	2012-7月	2012-9月	2012-11月
	新大関 11勝4敗		(大関) 9勝6敗	(大関) 11勝4敗	(大関) 10勝5敗	(大関) 10勝5敗	(大関) 10勝5敗

以上